

## 共同研究を終えて

研究副代表者 小熊 誠

国際常民文化研究機構における共同研究プロジェクトの活動趣旨は、約 80 年にわたる日本常民文化研究所が取り組んできた研究課題を対象として、それを現代的な視点に立ってさらに拡大し、深化させるために、新たな研究領域や研究視角を展望できるような学際的、国際的な研究を推進することにある。本研究プロジェクトは、「民具資料の文化資源化」の研究課題の中で、東アジアという地域領域を設定し、その領域内である特定の民具や物質文化を対象として、比較研究することを活動目的として 3 年間の調査研究を遂行してきた。その成果が、本成果報告書にまとめられている。

この研究課題に沿って集まった研究グループのメンバーは、研究代表者として民俗考古学の角南聡一郎氏、北東アジア研究の若手社会文化人類学者として太田心平氏、中国民俗学で墓研究の第一人者としての何彬氏、台湾と八重山における農具の導入を視点とする物質文化研究を専門領域とする朽木量氏、東シナ海を領域として洗骨習俗を研究している蔡文高氏（体調の関係で 2 年目以降は活動休止）、広東を中心に近年は台湾調査も開始して宗教グッズについて研究を進めている宗教人類学の志賀市子氏、同じく香港研究から近年はベトナムに調査領域を広げている文化人類学の芹澤知広氏と、中国考古学で食文化に関する遺跡を専門にする榎林啓介氏であった。小熊は、民俗学の立場から福建と琉球・沖縄の文化比較を研究対象としており、物質文化研究は守備範囲としていないが、その世話役として参加した。

この研究グループというか、研究仲間は、研究方法も、研究領域も、研究対象もまったく異なる研究者の集まりで、研究会を開くたびにさまざまな視点からの意見が飛び交い、まさに学際的な研究会を継続することができた。いつも、自由奔放な発言が、研究に対するイメージを大きく膨らませてくれた感がある。

3 年目に到り、物質文化研究の専門家があまりに少ないという反省に立ち、鈴木文子氏と中尾徳仁氏に新たに加わっていただいた。鈴木氏は、近代における朝鮮半島の郷土玩具のお土産化を取り上げ、植民地における植民者と被植民者との関係を分析していただき、まさにモノが語る歴史と人々の関係性を示してくれた。中尾氏は、天理参考館所蔵の中国民間版画を取り上げ、庶民生活と版画の関連性とその変化を明らかにしていただき、大いに物質文化について勉強させていただいた。

さらに、これでは成果報告のまとめに収斂していかないのではないかという懸念が生じ、加藤幸治氏と小島摩文氏をコメンテーターをお願いして、我々の研究会での発表に対して専門家からの意見を述べてもらう事にした。加藤幸治氏は、近年「流通民具論」という新しい概念を提出して、技術と民具を民俗誌的にまとめている（『紀伊半島の民俗誌』社会評論社、2012 年）。そして、本研究プロジェクトに与えてくれた評価は、以下の言葉であった。「従来の物質文化論は、個別の地域研究に囲い込まれてきた」として、学問領域間の交流が乏しかった状況を指摘して、「フィールドワークによって研究資料を獲得する文化人類学・民族考古学・民俗学・歴史学・文化地理学が、それぞれのアプローチで物質文化の動態的記述を試みる本研究プロジェクトは、現代の学問の縦割り状況の弊害を逆照射するであろう」（本書、189 頁）としてその学際的取り組みを評価していただいた。そして、「この研究会は『モノの専門家』でない諸分野のフィールドワーカーが、モノを基点にフィールドを描いてみるところに楽しさがある」とした上で、しかし、物質文化研究に依拠してしまって、インパクトに欠ける部分もあったという指摘もあった。この研究プロジェクトに期待

されているのは、フィールドワークを基礎としたそれぞれの研究の中で、フィールドにおける物質的な世界に目を向けて、そこから現地の生活を記述する中から新しい視点が獲得できるのではないかという提案をいただいた。今後、この研究グループが継続して研究を進めるとすれば、このような研究視点を持ち続けることが必要であろう。

小島摩文氏は、「いわゆる民具研究は渋沢敬三の郷土玩具の研究からはじまり、アチック・ミュージアムが本格的に稼働することで盛んになってきたと考えられてきた。民具という術語が渋沢敬三によって作られたことを考えると、厳密に言えば『民具』研究は、渋沢敬三以降ということなる」（本書、179頁）と、澁澤敬三を民具研究での創始者としての位置づけをしている。その澁澤が、『民具問答集第一輯』（アチックミュージアムノート第一、昭和12年）の「まへがき」で次のように述べている。「民具研究は、比較研究が第一である」（1頁）。これは、各地各種の民具を収集して、それを分類し、比較してその意味を探るという民具研究の方法論を意図しているのであるが、それを現代の物質文化研究の状況に照らせば、まさに学際的にそして国際的にモノを比較することによって、モノの奥に潜む人との関わりや人の歴史などグローバルな視点でとらえることができるという新しいモノ研究の視野が広がっていくといえよう。

さらに、澁澤は、「一つの民具が材料が調へられて、生れ出で、用ひられ、貯蔵され、破壊され、棄てられ、死んで行くその生活行程を殊に之を用ふる人々の心意との関連を重視しながら生態学的に見究め」（3頁）<sup>エコロギッシュ</sup>することは到底不可能なことでありと述べている。しかし、現在モノ研究に求められているのは、まさにこの研究視点ではないだろうか。民具の「生活行程」あるいは、人々の心意との関連そして生態学的な分析、どれをとってもモノ研究がいきいきと活性化する研究視点だと考えられる。

本研究プロジェクトは、まだ始まって3年にしかない。本書はその一里塚としての成果報告書である。この研究は、これで終わることなく、今後も、76年前に澁澤の指摘していた民具研究の視点を発展させて何らかの形で継続させていきたい。